

手記

# 花袋の「蒲団」と私

「蒲団」のモデルがはじめて  
公表するかくされた真実



「蒲団」の芳子のモデルといわれる筆者永代美知代さん

私が「蒲団」のモデル  
であることは事実です

私がああ有名な自然派文学の大作、田山花袋先生の出世作たる小説『蒲団』の主女主人公芳子であり、明治文学掉尾の傑作だとまで推称された『緑』の女主人公敏子だと云ふそれは、あまねく天下に隠れもない噂さで、現にまたその作家たる花袋先生それ自身が、左様だと発表されて居る以上、その虚実を明らかにする為めにも、それに就いて何か書くのは、蓋し余儀ないながら、当然の事に違ひないと思ふ。

ですけれど、私は果して本当に『蒲団』の女主人公なのでせうか——仔細に考へて見ると、女主人公ではない。決して女主人公ではないが、その生ひたちから学歴と志望を等し

ながよみちよ

永代美知代

くした、先生の最も身近に居た女弟子私なるものを、女主人公のモデルに使って、如何にもそれらしく、上手に似せて書かれたモデルです。モデルである事は確かな事実です。

成る程、私は同じ作家の「妻」といふ小説の終りの方に出て来る、文学好きの田舎娘が、その崇拜して居る都の小説家を頼って、遙々上京すると云った身の上でした。師と頼むその作家をさながら、神とも信じ崇拜して、崇拜の極、遠く利根川の彼方、恩師の故郷にまで、あくがれ歩くと云った有様でした。と云ふと如何にも突飛な性格であり、行為だと思はれませうが、元来私は花袋作「ふる郷」の愛読者で、一冊全部を暗で覚えて居た程の心酔振り、自然花袋門下に入り、そのお弟子ともなりました。処が折柄の日露戦争中、花袋先生が博文館から、写真班同伴の従軍記者として留守になる。云ひ知れぬ心淋しさ懐かしさの余り、せめてはそのふる郷にと、出掛けた訳でした。何の不思議もありません。

それから私は恋をしました。将来良人たる人として、特に選んだその恋人が、故もなく先生から嫌はれ、うとまれないければならぬ。悲しい運命とも知らず恋しました。その私達の恋のいきさつは、「蒲団」によく似た筋道

でした。

「蒲団」が初めて新小説の、巻頭小説として載せられた時、私は故郷の山かげの淋しい田舎町で、チブスを病んだ病後の胸ををどらせ、覆はせながらそつと読みました。先生の作で而も私をモデルの小説だと云ふことが、父母に知れたら、それこそ一大事です。どんな抗議が持ち出されるか、芸術家対田舎地主の不和を怖れて、女中達の眼をさげ、私一人の為めの自室に寝る、夜分のその時間をさへおどおどと、慄き勝ちに読みました。

何処も彼処、全部が全部、みんなよくもまあと、呆れ返る程、違つて居るけれど、何よりも彼よりも、一番腹立たしく、不平で綴つとして、大事な大事な誇すら忘れて取り乱したの、芳子の恋人田中秀夫に於ける、竹中時雄氏の描写です。私は今、敢へて、ですと云ふ現在動詞で書きました。何故と云つて、私が芳子のモデルである時、私の彼氏が芳子の恋人田中秀夫の、モデルとして使はれて居る、それは誰しも思ふ事ではなくてはなりません。そしてその女弟子の恋人に好意を持ち得ぬ作家から、殊更ら悪意以上正に敵意とも見られるまで、あゝした変手古な、デレデレした厭味一方な、うつけのまぬけの、へろろく玉の標本みたいな描き方をされて居る。その

描写が何としても残念、承知がならぬ。私その時の口惜しさは、今この現在に至った今日も猶、ちゃんと続いて居ますもの。でしたと云ふ過去の言葉でもって、簡単に片附けられるものでは、断じてない。

### 芳子の恋人秀夫と似た實在の私の恋人

私はあの時の夢を、今でも時々見ます。「蒲団」の芳子の恋人が初めて上京したのは、例の一件突発の直後、恩師の詰問を周章で報じた、芳子の甚い狼狽に、これまた驚ろき周章で、その善後策を講じようとしての上京でしたが、僅かに中一日見物したきり、さつそく追ひ帰へされ、結局竹中氏と会見すらしなかつた。

九月も終り十月に入り、恋人同志の書いても書いても厭きない音信が、人目に余るやうになつた或る日の朝、郵便受函から自分の手で竹中氏が受取つたのは、芳子にあてた一枚の英文端書であつた。何気なく読んで見ると一月程の生活費は準備して行く。あとは東京で衣食の職業が見つかるかと云ふ意味。京都田中としてあつた。平和は一時にして破れた。翌日コンヤ六

ジシンパシソクの電報を受け取つた芳子は、途方に暮れたが、夜分の事で勿論出迎へは許されず、例によつて例の如き、三日に続く竹中氏の憤懣煩悶の後、遂に意を決して芳子の恋人を訪問した。而もそれはあの夜投宿した新橋駅前前の鶴屋旅館から、何時誰の世話で移つたものか、書かれてないから知る由もないが、田中青年はその時つい此の程まで、芳子が預けられて居た土手三番町から、すぐ附近な同じ廻町三番町の、下宿を兼ねた、安っぽい宿屋に泊つて居た。

「まことに先生には、よう申訳がありませんのやけど……」長い演説調の雄弁で、形式的の申訳をした後、田中と云ふ中背の、少し肥えた、色の白い男が折袴をする時のやうな眼つきをして、さも同情を求めるとやうに云つた。

成る程形式的な申訳としては通るか知れないが、あの変手古な京都弁が、何処の世界で演説調の雄弁で通用しようか、地元の京都っ児にも、あんな言葉は通じない。おまけに私の彼は肥つた色白の反対で、疲きすで、寧ろ小麦色の、中背どころか背低の小男だ。

「君は忍んで京都に居りさえすれば、万事叶はす、二人の間柄も将来希望があるので」

「よう解つて居ります……」

「けれど出来んですか」

「どうも済みませんけど……制服も帽子も売つて了ふたで、今更ら帰るにも帰れまないと云ふ次第で……」

此処に至つては呆れてものも云へない。いづつ如何なる場合にも、自己を忘れて取り乱してはならぬ。取り乱して自分自身の品性を汚してはならぬ。これは幼い頃から教へられた母のしつけで殆んど習慣的に酔癖つけられた私です。でもこれは如何してもやりはかない不平となつて私の胸にしつこく残る。ずつと後、郷里から二度目に先生の許に引きとられて居た頃の事ですが、或る日何かの談話の序に、私はそれとなく訊きました。

「先生、ねえ、先生！」

「何さ？」

「私、お訊きたい事が御座いますの」

「だから何さ？」

「だつて悪いかしら？」

「云ひかけてよすなんて、君の悪い癖だ」

「ではね、先生——余りだつたとお思ひになりません、あの描写「蒲団」の芳子の恋人、田中秀夫のモデルの描写！」

「ずばり」と云つた時、流石に先生もどきりとした容子で、返事はなく、ふいとそっぽを向かれた。でも私は続けた。

「あれでは私、秀夫のモデルが余り気の毒

で、可哀相みたいな書き方だと思ひますわ」

「だつて君、仕方がないさ。さ、さ、作者の主観に左様写つた以上、仕方がないさ」

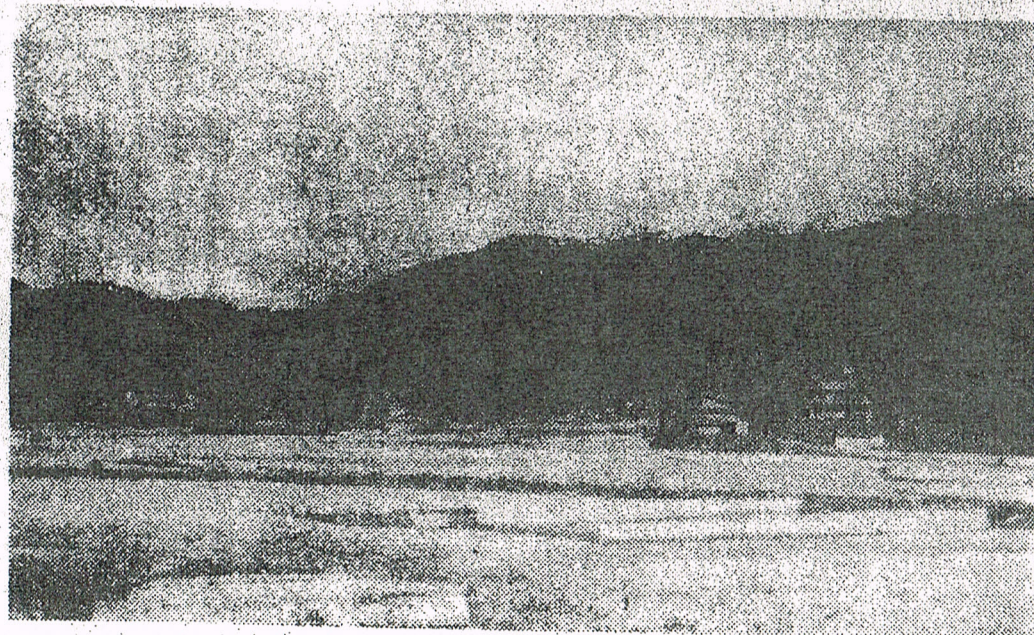
何たる簡単な返事ぞ！ 私は早速二の矢をつぐべく息まいた。でも余りにも周章で、激した時の癖のしどろもどろさが、気の毒にもなり、恩師に対し少々不遜とも気づいて、黙つて了つた。併し無言や無言、その時の私の顔は、先生の仰有る所謂七面鳥式表情の本性を表はし、あらゆる憤りの形相だつたでせう。

「まあ君、そろそろ昂奮しないでさ。今更昂奮したつて仕方がないさ」

「今更仕方が御座いませぬわね」

皮肉に聞えたでせうけれど仕方がない。作者の主観にさう写つたから仕方がない。今更昂奮して文句を云つた処で仕方がない。左様云つて了へば如何にも仕方がないが、作者の主観の鏡は出来るだけ、磨き澄まされてあらねばならぬ。一点の曇もあつてはならぬと云ふのが、先生兼ての主張であつた。して又先生は仰有る。真ほど自然なるものはない。作者たるものは一分一点の真をも曲げてはならぬ。之によつてこれを見る時、私に限らず読者は誰でも、先生の作物からすぐ或る事実をつかむ事が出来ることさへ思つて居る。然るに真ほど自然なものはないと云ふ、その自然派の作家によつて描かれた、「蒲団」の芳子の

恋人秀夫と、そのモデルの真なるものは如何か、秀夫のモデルと、モデル自体とが、余りにも違ひすぎて居るやうに云ふそれは、たゞに私一人の眼ばかりではない。幼くして父親に死別した彼は、親らしい親も持たなかつたか知れないが、親なしの彼の周囲にも友人はあつた。その友人達が見て皆な私と同じ不平を云つて居る。それは併し恋人であり、友人である関係から来る怨眼であつて、文壇の重鎮たる作家、先生の主観の鏡は絶対的なものなかも知れませんが、何はしかれ家庭を破壊してまで、進んで結婚する気はないが、突然横合から現はれ出た、一介の学生風情に、わが門下の女弟子を奪つて行かれて堪るかと思ふ、それだけの、ほんのちよつかい憎しみで、本當の意味の嫉妬でないまでも、嫉妬は嫉妬で、その陰影が、一点の曇も残してならぬ、磨き澄まされてあるべき筈の主観の鏡に多少のかけりとなつたのではあるまいか。それとも先生ほどの大家ともなれば、自分自身主観の鏡に曇のないものと云ふ、自信も出来て「作者の主観にさう写つた以上仕方がないさ」と涼しい顔で、済してゐられるものなのか。お蔭で秀夫のモデルは、遠い郷里の山に自分の代りとなつて退いた恋人に、端書一枚直接の音信も出来ぬ、失恋以上に苦しい立



上下町遠望—永代さんの生地

送られた特殊保助生で、将来牧師たらん志望を抱いて神学部に着籍を置き、感話に説教に、時々副牧師代理位はつとめた青年だと云ふ、どう考へてもこの会話は受けとれぬ。時雄の眼に映じた田中秀夫は、想像したやうな一箇秀麗な丈夫でもなく、天才肌の人とも見えなかつた。基督教に養はれた、嫌に取り澄ました、年に似合はぬ老成な、嫌な不愉快な態度であつた。京都訛りの言葉、色の白い顔、やさしい処はいくらかはあるが、多い青年の中から、斯様した男を特に撰んだ芳子の気が知れなかつた。殊に時雄が最も厭に感じたのは、天真流露と云ふ率直な処が微塵もなく、自己の罪悪にも弱点にも、種々の理由を強めてつけて、これを弁解しようとする形式的態度であつた。この暑い安宿の一室に相對して胡坐もかゝず、二人は妙くとも一時間以上語つた。話は逆に要領を得なかつた。幾ら

安宿の一室だとして、時は巳に九月も終り十月の初旬、たとへ一時間以上の對坐にしても、辛抱出来ぬ程暑くはなかつた筈。互一あの場合初對面の長上の前で、秀夫が胡坐の一つもかいたとしたら如何なつた？ まさか野人礼にならぬ天真流露を發揮した率直さでは許されまい。馬鹿か狂人か、話にならぬ下劣漢だ位、罵倒されなければ納るまい。作家としての青年と、年齢から云つても、地位から云つても、その間には怖ろしく差異がある。つまり万事に世馴れない、世の中と云ふものの解らないものとする事なす事へまな形式的態度とも見え、弁解がましい無責任とも思はれたでせう。弱い者が強い者から圧迫されるのは、古今東西蓋し、止むを得ない事実だから仕方がない。ですけれど秀夫がひそかに持つた自己の罪悪、強て種々の理由をつけて弁解しようとしたその弱点——どんなものか、果してあつたか無かつたか、それさへ知れぬ心の奥の奥まで、たつた一時間そこそこの会見で、而も初對面の其席でもつて、すっかり見透し得た竹中氏の秀れた觀察力の偉大さは、正に驚嘆に値する千里眼的であらねばならぬ。自然竹中氏は次のくだりで、自分自ら反省もした。

「先づ今一度考へ直して見玉へ」くらいが最後で、時雄は別れて歸途に就いた。心にもな

場に置かれた其上に、自ら活きねばならぬ生活の重荷にあへぐ苦学生の手で、都大路をあちこち就職の口を探して廻り、やつと出来かかつたと思ふ度の嬉喜び「君は蒲団の秀夫のモデルだぞうだね」で駄目になる。就中残念だつたのは、当時東京読売新聞の文芸主任、正宗白鳥氏から同じ理由で断られた、それでした。白鳥氏は私が先生に入門当初から、よく先生を訪ねて玄関に立たれた時、幾度となく取次いだ記憶もあるので、猶更口惜しい。でも私は先刻夢の話を書いて居ました。いまだによく見るあの頃の口惜しかつた夢の話を書いて居ました。竹中氏と芳子の恋人秀夫と、初めて会見する一駒を書いてゐたにもかかはらず、ふだんから胸一杯もやついて居た鬱憤を吐き出して、花袋先生と、秀夫のモデルに使はれた、モデルの实物の会見と、二つ並べて書き度いつもり、最初の段取りを、危く忘れて了ふところでした。

自然話を前に戻して、竹中氏對秀夫青年初對面の場に続ける——

「それぢや芳子を国に歸すですか」

かれは黙つて居る。

「国に云つてやりませうか」

矢張り黙つて居た。

「私の東京に参りましたのは、左様云う事に

は寧ろ關係しない積りでおます。別段こちらに居りまして、二人の間には如何といふ——」

「それは君は左様云ふでせう。けれど、それでは私は監督は出来ん。恋は何時惑溺するかも解らん」

「私はそないな事は無い積りですけどナ」

「誓ひ得るですか」

「静かに勉強して行かれさへすれアナ、そないな事はありませんけどナ」

斯様云ふ会話——要領を得ない会話を繰り返して長く相對した。

私は敢て秀夫の爲めに弁護する。会話の内容の如何は兎も角、仮りに秀夫は京都同志社神学部の生徒ではなかつたか、関西地方の一部に限られた中学生たりと雖も、其土地生え抜きの土地っ兒同志ならいざ知らず、幾ら明治三十七八年日露戦争中のあの時分でも、他所土地の人の前で殊には初對面の長上の前では、標準語を以てして、決して地方弁は使つて居ない。まして況や京都同志社なるものは、基督教学校の御本山とも見る、全国的有名な学校で、創立者新島襄先生の感化を慕ひ先生なき後も参り来る学生は、北は北海道南は九州鹿児島に至る有様で、其寄宿舎で語られる言葉は、自然何処にも共通の学生弁でなくてはならぬ。それに秀夫は神戸教会から

いお世辞を云ひ、自分の胸の底の秘密を敵ふためには、二人の恋の温情なる保護者とならうとまで、云った事を思ひ出した。安翻訳の仕事周旋して貰ふため、某氏に紹介の労を執らうと、云った事をも思ひ出した。そして自分ながら自分の意気地なく好人物なのを罵った。

オヤと私は首をひねらざるを得ない。今一度考へ直して見玉へと云つて別れた位で、あはよくは秀夫を退京させ度い、芳子をして明日にも帰京を勧めさせ、是が非でも説得させないでは置かぬつもり竹中氏が、二人の恋の温情なる保護者とならうと云つた、それは兎も角、ならば東京に置き度くない秀夫のために、安翻訳の仕事周旋して貰ふやうに、某氏に紹介の労を執らうと云つたとは、幾ら心にもないお世辞とは云へ少々行きすぎの約束ではなかつたか。何としても不思議な疑問の言葉です。或は何かの錯覚から来てるのではあるまいか、私は全く首をひねつて考へました。

### 恋人の上京にふん がいする田山花袋

アスヒル二ジ ユキマス エヌ

又、都合で、ずっと当方に居る気だらうか、君、本当に如何思ふ？」  
「解りませぬわ」

「假りにだね、もしもずっと当方に居るとしたら——居る気で来たとしたら、君は如何思ふ？」

「……」  
「又黙る！ 居る気で来たとしたら、君は如何思ふか、それを訊いてるんだ、それを！」

「だって先生、如何思ふも斯様思ふも、まだ決定もしない事ですもの」

「否、きまつてるも同じだ。或は常だん手紙で、君の方から出て来るやうに勧めて居らんぢやないかね？」

「違ひます！」

「まさかね。だが併し、見て居たまへ、どうせ、何とか世話を頼むつて事でもつて、出て来たに相違ないんだ。だから空想青年は困るんだ。右から左へ、オイそれと都合の好いとばかり、転がってる訳がない。無分別にも程がある、馬鹿の骨頂だよ。その結果は如何なるか、俺はそれが怖ろしい。軽率盲動の結果、愛する女を苦しめ、危地に泣かしめる。

馬鹿な奴——その結果が見え透いて居るだけに、俺は堪らん、そいつを怖れる俺のこの心

云ふまでもない電報は、京都の彼氏から私あてのものでした。

九月も終り十月に入った六日の朝で、丁度日曜日とて先生も御在宅。九時から十時までの間、ツルゲネーフ物の講義で、一日中一番楽しい時間の筈なのに、突如として曇つた先生のお顔と一緒に、家中何も彼もすべて、陰惨そのもののやうな状態となり果てた。

「アスヒル二ジ——」  
受け付け局の時間を調べて、先生は仰有つた。

「何だ、今日ぢやないか、今日の二時だ」  
突然の電報なので、私も全く驚いた。

「一体、何の爲めに出て来るんだ？」  
「——」

「何故云へぬ？ 返事をしたまへ」  
「私、見当もつきませんもの」

「併し、君の処に、何とか手紙で云つて来てるだらう」  
「いえ」

「嘘をつけ、嘘だ！」  
「先生、私、嘘は申しません」

「へん、毎日毎日、厚い封書の連続、絶え間なしぢやないか。見せ玉へ」  
私は余儀なく二階に立った。自室の机の引出しから、彼氏最近の端書を持ち出した。

が、君に解らん筈がない。解るか、解らんか、俺はそれが訊き度い、それを訊いてるんだよ、それを」

「黙つて居たんぢや解らない。黙つて後向く、君のその態度を見ると、俺は堪らんく焦々して来る。君にはこの俺の心が解らんのか、俺はそれを聞き度いと云つてる、如何なんだ、返事をし玉へ、返事を——」

真根になつて、声をからして、嗚咽り続ける先生の不機嫌。かと云つてそれを如何取り結ぶ術もない。此上黙つて居れば叱られるにきまつて居るし、如何して好いのか途方に暮れた。無暗と血の気がうせて、病的に蒼白める顔が、私には自分で解つた。

「だがまあ好いさ。一気にいらいら心配して見たところで、如何なる問題でもない。要はたゞ、君の態度如何にある事だ。君さへしつかりして居れば何でもない。如何にかなるさ。しつかりしてさへ居ればそれで好いんだ。余の心配しなくてよるしい、ね、落着く事だよ」

「は」  
頭がふらつくので、私は鳥渡と一礼して、二階の自室に引き上げた。郷里の医者の方によつて、神楽坂の薬局雨宮で調剤された持

た。

此処数日非常に多忙を極む。音信の寸暇もなければ、元氣なり。心配無用。たゞ、信じて待ち給へ。やがてよき事あるべし。御身の恙きを切に祈る。N生

「この、よき事あるべしとは何だね」  
「解りません」

「此の端書の前後に何かある。此度何かある。其奴を見せ玉へ」

「その端書きり、何も来て居ません」  
「では前のを、この端書の前のを見せ玉へ」

「此間もう御覧になつて居ます」  
「ナニ、見たつて？ 何時？」

「恋愛は實際問題か如何か、私、あの事で悩んで居て、お訊きした時でした」  
「ふうん——だとすると、例のあの、既成宗教に対する新人の悩みを書いて来た、あの手紙か」

「この頃はよく、宗教上の悩みを書いてよこします」  
先生は端書の消印まで、丹念に調べた上、何かしら数べるやうに指を折り、又端書を取り上げて見入つた末、流石に誤解と解つたらしい。

「余りにも突飛に過ぎるんだよ。ね。何かの用事で、鳥渡と出て来る気かね。それとも

菜を飲み、乱れに乱れた心を落ちつけるやう、懸命にとめた。

「アレ、朝から又お酒なの？」  
「一本だけだ」

「又どろんこに酔払ふんですか、此頃は全くどうかたつてますね。岡田さんのあの電報の事なんか、如何だつて好いぢやありませんか、それとも、酒でも飲まなきゃ堪らん程心配なのですか」

「馬鹿！」  
階下から、とんがらかつた声が聞えて来ます。折角の日曜日気分はむざんに攪乱されて、重苦しい家庭の空気が四辺一面、はやくもそこはかとなく押し扱がって漂うた。

中食の時、私はことはつて降りもせず、先生は此頃頻りに始つた悪い癖の飲酒のあと、今日は案内音無しくお昼寝か、お茶碗の音も、兎達の声も、いつもより低く小さくて、たゞ無気味に、ひっそりと静まり返つた。

初めての東京なのに、新橋駅まで出陣へも出来ず、気が深めて仕方がないけれど、斯様した事情で、あれこれ、立ったり居たり、ただ徒らに時間の経つのを待つよりほか、どうにもなる事ではなかつた。

た。

# 花袋とヒロイン

## 若子の恋人の対面

『御免下さい』

表の格子戸が開けられて、私の彼氏が訪れました。新橋着から此処半込の矢来まで、不案内の道を予想された時間以内に、迷ひもせずと思ふと、ホッとしました。

『御免下さい』

二度目の声ですもの、ハッとして思はず立ち立つたもの、其後玄関に出迎へてよいか悪いが、今朝からの家庭の空気を考へて、とつおいつ、静かに聞き耳を立て、居ると、如何やら誰かに取り次がれたらしい。

『アレ、馬鹿に静かだこと、まさかと思ふけど、眠ってるの？ 岡田さん、岡田さん、呼んでますよ書斎で、早くいらつしやいってさ』

斯様なつては仕方がない。真緘になつておどおど降りて行くと、茶の間の入口に佇んで居た奥さんから、そつと一つ肩を叩かれた。

『あなたはいひとよ』

逃げるやうにして書斎へ入ると、此処には最う主客二人が相対し、初対面の挨拶も済んだ様子で、先生はいつもの机に肘をつき、少し離れた正面に、私の彼氏が小倉縞の白つぼ

い袴を行儀よくひろげて、与へられた座蒲團の上に居た。

『どうしたの、遅いぢやないか』

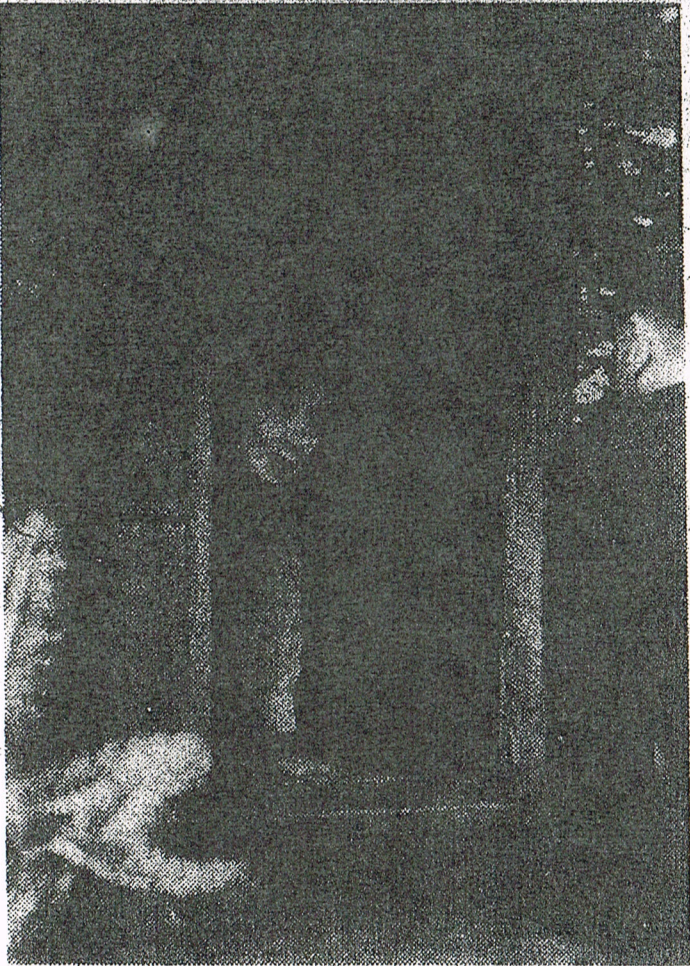
朝の間のあの不機嫌な先生とは思はれない。

『鳥渡としたショックにもすぐ如何かなる、過敏でね。どうも困るんだ。ハッハッハッ』  
はにかみながら先生を見て、そして彼氏に会釈した。

『まるで見合ひと云つた感じだね。二人とも馬鹿にしやちこぼつてますね、折角久し振りに会つたんだ、もう少し打ち解けて話しても好いでせう、ハッハッハッハッ』

いつもの謹厳な先生でもない。かと云つて今朝のは、たつた一本きりだつたあの飲酒が、今まで残つて居るとも思はれぬ。けれども何かしら異変がなくてはならぬ、変手古な、腑に落ちない調子であつた。

『少くともお互男同志は、うんと打ち解けて談す事ですよ。さつくばらんね。僕は今朝も君の電報を見て思つた事ですがね、広い此の世間で数多い人間の其中から、僕の美知代と、その美知代を問に置いての君を、此の僕が知る事になる。如何考へても縁だと思はずには居られない。不思議な眼に見えぬ、縁の糸につながつたお互だよね』



広島県庄原市にある筆者の家と筆者

『もう教師になりたくないって訳ですね』  
『三位一体を信じない教師はありますまい』  
『僕には解らん、処で文学志望の君は、小説でも書かうと云うのですか』  
『如何かと思ひますが、ならば是非やり抜いて見たいと思ひます』  
『今更京都に帰るも出来ぬ事情なら、此方に留つて文学をやり度いと云ふ、君の志望をむ

げに退ける訳にも行きません。だが此処に一つ、重大な問題が残されて居る。若い同志が同じ東京に居て、同じ一つの志望に向つて勉強する。誰しも好ましい事ではあるが、困つた事に、恋は何時感濁するか解らん。となると監督者たる私は、忽にして立ち場を失はなければならぬ。如何ですか、誓ひ得ますか』

『その事に就いて、まだお礼の御挨拶も申しませんでした。先日過分な御手紙を頂きまして、何たる光榮ぞと唯々感泣あるのみで、其上に先生御自身深夜の街のポストに御投函の事を拝見しまして、実に感激に堪へませぬ』

『し、し、併し君、き、き、君のその感激は魚も角だね、君の今度の上京の動機に、何等関係があつた訳ではありませんまい』

『……動機は他にもありました。併し先生に対する感謝と感激が、その動機に関連した最大なるものだつたとも云ひ得ます』

『……それで君は、東京に出て来て、一体如何しようと思ひます？』

『文学をやり度いと思ひます』

『文学？ 併し君には宗教家たらんとする確乎たる志望が有つたぢやないですか』

『先生、私は今その確乎たる最初の志望をなした。基督教会に於ける異端者です』

『それは又何故ですか、君のあの、既成宗教に対する新人の惱みなるものも、美知代宛の手紙を讀んで知つてます。だが、それ位で確乎たる最初の志望を、捨て去る程の事ぢやないぢやないですか』

『処が先生基督教の根本たる三位一體を持つた今の私としては、絶対に駄目なんです』

『僕が誓つた温情なる恋の保護者たらん、云々も今直ぐではない。監督者たる僕の立ち場を思つて、真に誓ひ得るか如何か、僕は誰か度い』

『余りに慎重で、而もいま迄考へ思ひも及ばなかつた問題なので、即答いたし兼ねましたが、先生のお言葉、一々当然の事と承りました。誓つてお言葉に添ひ度いと存じます』

『では僕も此処で信じて、今後の成り行きを見るときします』

『は』  
彼は鄭重に頭をさげた。

『処で君、甚だ立ち入つた質問ですがね、生活の問題は如何のですか』

『御承知の通り、私は元來苦学生なので、貧乏には馴れてますから、最も謙遜な生活をして、最低限度に生きるとして、よく行つて半年、悪くすると五カ月位が、せいせいかと思ひます』

『ホウ、半年か五カ月！ それは又羨望らしいぢやありませんか』

『サア——その間に、何とか次ぎの取入を考へなくぢやありませんから、中々大変ですよ』

『併し、どうしてそれだけの余裕を持ちましたか』

「なげなしの書物を全部売りましたし、教会の会員から、そして個人的知り合ひの信者から、思ひも掛けない餞別を貰った訳でした」

「兎に角よかったです。ナアにね、それだけの余裕をもって、真面目に努力さへしてあげれば、それから後の道は何とか開ける。僕も安翻訳の間旋でもして貰へるやうに、出来るだけ方々の知り合ひへ、紹介状でも書いて尽力しませう」

何たる有り難い会見であったでせう。ふと気がついて見ると、自室の障子は白々と、何時か夜が明けて、枕元の灯火が、徒らにたゞあかあかとついて居る。

### 書生故にさげすまれる秀夫のモデル

これが本当の見果てぬ夢か。ともあれ、「蒲団」の芳子の恋人田中青年が、竹中氏との初対面と、花袋先生対秀夫のモデル、私の彼氏の初対面と、どの程度にまで違つて居るか、世間の皆様に比べて読んで頂けたら、どんなに任せせてせう。妙くとも私は胸がすく思ひなのです。

私は最初呼ばれて、書斎に入ったその時から、先生と彼氏の間に取り交はされた会話で

もって、早くも気がつきました。いつかの夜おそくまで起きて居て、書斎で書かれた先生の手紙こそ、私の彼氏に偉大な感謝と感激を与へたものだった。そしてその手紙を御自分自身、深夜のポストに投函された話は、あの翌くる朝奥さんの話で、私は聞き知つて居た。而も先生は彼氏からの電報を見たそのせつな、或はその手紙が今度の彼氏の突然の上京に、何等かの動機となつて現れたのではあるまいかと、些か心配にもなり、私から彼氏最近の端書を見せるやうにと迫つたり、幾度となく仔細に丹念に、消印まで調べあげ、何やら指を折つて致へて見たり、思へば不審な容子であつた。

ふだんから一徹短慮と云つた嫌ひがなきにしもあらずの先生ではあつたが、兼て博覧強記を以て自ら任ずるところもあり、流石に先生は私の彼氏に書き送られた一通の手紙を、忘れずに居て下さつた。そして彼氏が苦学生であるそのために、何等生活上の用意もなく、突然の上京で、当然苦しみ悩まなければならぬ、当面の日常生活を、嘸や嘸と思ひやり、ひいては恋仲の私の上及びされべき困難苦痛にまで思ひ到つて、種々気を探んでゐられたところ、案外生活上にも予期以上のものがあつたので、怒眉を開いて喜んで下さる、市内電車の終夜運転、彼氏から見て好個な社会問題でもあつたでせう。

「一晩中電車に乗つて廻つて、私は到頭終夜運転の、電車の中で泊つてしまひましたよ」

彼氏が云ふと、奥さんは眼をぱちくり、呆れて云つた。

「アレまあ、下宿にも帰らないでねえ。電車の中で一晩中泊りでしたの、寒かつたでせうに、風邪でもひくと大変ですよ」

これが奥さんの口から、先生の前に報告された時は、とんでもない事になつて居る。

「岡田さんのあの人ね、大晦日の晩、たうと下宿にも帰れなくなつてさ、終夜運転の電車の中で、泊つたんです。余つて程困つてららしいですよ。あんな書生つぼの何処がい、のでせう。岡田さんのお茶人にも呆れませぬ」

たうとうしまひには、お茶人呼はりまでされました。併し恋する当事者以外、わきめにはよくもあんな男を、女をと思はれ勝ちなので、一概にお茶人呼はりされた日には、天下

つた。安翻訳の間旋をたのむために、成るべく方々の心当りへ、紹介の勞をとらうとまで約束されたのも、竹中氏が秀夫青年に云つたやうな、満更、心にもないお世辞とばかりも思はれなかつた。でも如何した訳か、先生からの紹介状は中々書けても頂けなかつた。

おまけに彼氏に向けられた奥さんの眼は、寧ろ辛辣なところがあつて、兎角評判が悪かつた。

「嫌な人ねえ。あんな人を、あんな書生さんを、恋人にしないだつて、幾らも好いのがあつてせうに、あれではとても望みはありませぬよ。岡田さんも余つて程の好きね」

鳥渡と玄関で取り次いだ位で、何が解る。

書生さんだから厭な人なのか。陸軍士官学校の卒業生でなくては、嫌にはやれぬ。少くともそれと同等の給料取りでなくては見込みがない、この条件つきでやつと縁談がまとまり先生との結婚が成り立つたと云ふ、物質万能な親御の手から、良人の手に渡されたこの奥さんの眼から見た、一介の書生つぼなど、厭な人に決つて居る。まして況んやその書生つぼなるものが、まだ何処の学校にも籍を置いて居ない、苦学生だと云ふ事が、誰からともなく嘆かれ、所謂潜在意識となつて頭脳に残つて居るのだから堪らない。

その年の年末から、先生は博文館の地誌の

が、彼氏の前で、私の事を云ふ場合「僕の美知代が」と、特に僕のと云ふ言葉を、美知代の上につけ加へる事でした。

「何も僕の美知代と、殊更らめかしく冠せて呼ぶ必要はないでせう。僕は実に不愉快ですよ。あの言葉を聞く度、実に不愉快で、僕はやり切れない」

私達はよくその事で云ひ争つた。

「何もそんなに気にする事ないでせう」私は弁解する「私が先生門下の女弟子である以上私の名の上に、僕のと付け加へられるのは、当然の事だと思はない？」

「思ひませぬよ。断じて思はないし君は本当に当然の事だと思つて居るの？」

「蓋し仕方がないんじゃない？ 先生はまた私達お互二人の事を、私達が、私達がつて云ふ、それを気にして、まだ許婚の被露もしてない癖にして、まるで許婚同志が何かのやうに、平気で私達と云つてゐる。実に聞き兼ねるって、ね、つまりは同じよ」

「違ひます」彼氏は反駁する「私達は二人

を意味する君と僕だもの、文法上叶つて居る。併し先生の場合、かゝる必要なし」

語である以上、英語のやうに、所謂の必要なし」

「だだ斯様だと、云つたところで、

大晦日の夜通し、市内電車の終夜運転が初めて始められたのも、其年の暮でした。京都から出て来た彼氏にとつて、それは実に珍らしい、大都会の風物でなくてはならなかつた。自宅へ帰れば借金取りの赤鬼青鬼共捕つて、責め殺されしかねぬ程の貧乏

つまりは感情の問題だわよ。くだらないわ、よしませう」

「如何考へても僕は不愉快で堪らん」

「あなた、二階ではこれよ」

「お、気の毒な私の彼氏よ！  
云ひつけ係りの奥さんが先生に貰いて、針で着物を縫ふ真似をする。」

「紺緋の書生羽織よ。白い木綿の長い紐も買つて来てありますよ」

その夜私は先生から詰問された。

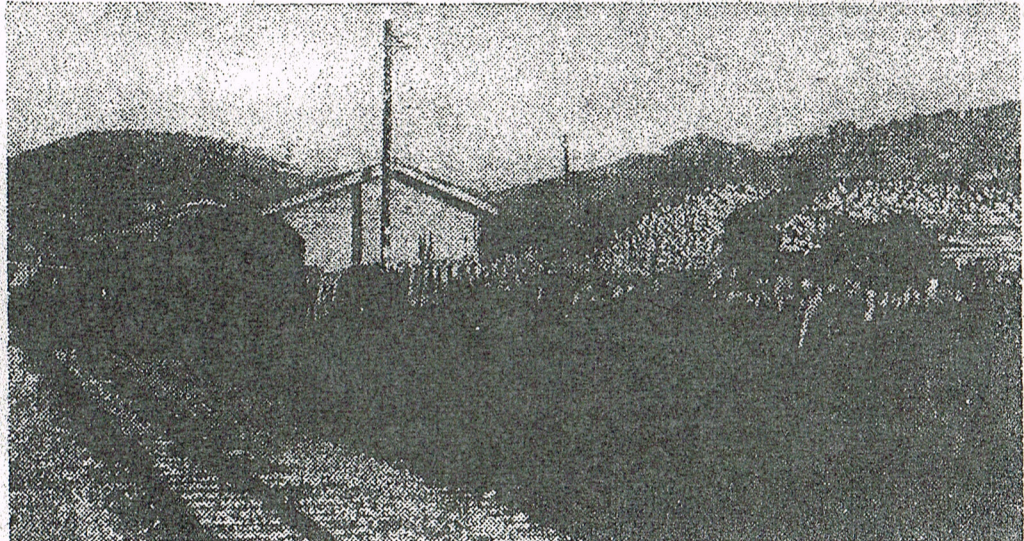
「降誕祭の贈物ですの。西洋では手製品が喜ばれますけど、あれきりではよしました」

「何故よした？」

「時間がかゝりますもの、あんな実際の雑用に追はれるの馬鹿げますもの」

先生はそれで無言。でも私は平気でした。

入門前の降誕祭には先生に、手編みの毛糸のシャツを女学院から贈った。特に撰んだ未来の良人たる恋人に、何かな贈物するのは当然だ、親から送られる学資も余つて残る。それ以外此処二三年間授書で得た賞金全部を貯へた金もある。それを費へば紺緋の着物の三四枚、キヤラクの裏付きで、同じ羽織の二三枚、袴も二下、小倉織の鼠縮位大丈夫買へた。あの時分、もしも大正年間相馬泰三が、私達友人に気兼ねしながら、葛西善藏にそつと内緒で買つて着せた、金六十銭也の染付け



材木で有名な上下町の駅

紺の単物を売った阪代町の古着屋街を知つて居たら、同じ牛込区内ではあり、飛んで行って買ったかも知れないが、惜しや、此の世の中に染付け紺のある事さへ知らなかつた私は、紺緋と云へば久留米とばかり、特級ものを買った訳でした。でも苦学生だから知つて居るかとも思つたけれど、夏になつたら裏をとりかけて単衣にも出来ると思つて置いた。勿論自分の手では縫ひません。御仕立物仕候と、内職の札を下げた喜久井町の、さる家を見つけて頼んだ。

自分の手で自分の良人たるべき恋人を撰んだ、それが已に、昔風なら親不孝です。でもそれは人間としての権利で、新派の私は何等恥ぢる事もない。たゞそれ以上、折角屋とした家に産れた義務として、家名を傷け祖先を汚す間違つた行為をせず、威張つて新しい女の道を歩き度い。斯様した意気の私です。

とは云へ秋もふけて冬ともなれば、木枯らしの風寒く、二階の自室で彼氏と会談する日が多かつた。後に頻繁になり、殊には利根川畔に先生出張の留守中、奥さんと口論した。「だつて、此寒空に、戸外は歩けません。此処以外、会見の場所が何処にありますか」そんなこんなで、音信さへ三度に一度は人眼を避けた。そつと学校を休んで何処かの寺

の境内か、あれた空地の中の古びた祠の傍を会談の場所にと利用する、まだ春には間遠い真冬の間、全然逢はずに如何して居られよう。然ればとて、彼氏の下宿を訪れるのは、余りにも後ろめたい。万事あけすけで行き度い私が、これでは駄目だ。これ程重大な悩みはない。私は遂に上越出張の先生に手紙で訴へました。

先生、私達は今感濁の一步手前にあります。同棲か感濁か、恋の並木の岐路に立ち、今同棲の道を狭び度いと告白する私達は、不真面目で御座いますか、どうぞお許し頂き度く、先生の御訓示の程お待ち致します。

「蒲団」では猶々書きで私が書いたとある。上野の図書館で見習生入用の広告を見た、それに応じて見度い——併し産れつき病弱で学校でさへ、鬼角体み勝ちな私に、定刻の時間に必らず出勤の事務員がつとまる訳がない。嘘です。部屋代、薪炭米糧、副食調味、日常の経費を事も細かに計算した表を作り、實際学資を打ち切つて、たとへ勘当の事となつても、先生御一人の御理解にあらば、心の苦痛は一切ない。たゞ思ひ切つて同棲し度いとだけ書き添へた。

すると一途に家郷を懐み、私達の恋を不安に思ひ続けた先生とて、恋の力は遂に二人を

が、購所の弁解をさせませうか。証憑となる手紙があるでせう」

「其処までせんでも……」

父親は関係を信じつゝも、その事実となるのを怖れるらしい。

運悪く其処へ私がお茶を運んだ。

「君の潔白の証憑に、あの頃の手紙を呈せ玉へ、あの頃の手紙があるでせう」

「手紙はもう一々御覧済みです。それよりも先生、膳所の料亭の領取書が、先生にお預けしてありますね」私は屹として云ひました。

「蒲団」の芳子のやうに赫くなつて困つたりするもんですか。余りその文通の頻繁なのにその良心を抑へて、こつそり机の抽出やら文箱やらを探した。恋人のするやうな甘つたる言葉は、到る処に満ちてゐた。けれどそれ以上にある秘密を捜し出さうと苦心した。接物の痕、性慾の痕が、何処かに隠はれて居はせぬか、神聖なる恋以上に二人の間は進歩して居はせぬか、けれど手紙にも解らぬのは、恋のまことの消息であつた。これは勿論「蒲団」に書かれた芳子の恋を疑つたその恩師竹中氏の告白であつて、わが花袋先生御自身の行動ではない。先生は今更左様な行為に及ぶまでもない。少し部厚な私あての手紙が来るたび、一々見せると迫つて点検済みではな

深い感濁の淵に沈めた。もう斯様しては置かれぬ。二人一緒に暮し度いと云ふ大胆な言葉の中には、警戒すべき分子が多い。或は已に一步進めて居るかとも思ひ、その結果私の父母に手紙を書かれた。その手紙の主旨は勿論兼て誓ひの、温情なる恋の保護者としての態度を考へ、極力二人の恋を庇保し、どうしても此恋を許して貰はねばならぬ、それであつた。而もその手紙の奥には、寧ろ郷里の父母の反対を極力希望した、人知らぬ先生の心がかくされて居た。まだ「蒲団」の発表されなかつた以前、どうして私達がそれを知り得ようか。刻々迫り来る運命の力の前に、何の備へもなく、純情なる若い私達二人は、ひたすら先生への信頼をその庇保にかけて、たゞ待った。たゞ待つて哀れに行動しただけでした。

やがて郷里の父の出京となり、彼氏を呼んで会談の後、先生と父との間で私達二人の關係に就いて種々語られた。

「二人の間の關係を如何御觀察でせうか」

「有ると思はんけりやなりますまい」

「極めて置く必要があると思ふです

かったか。

父はその夜奥さんのお心尽しによる、夕飯の御馳走になって旅宿に帰った。あゝその一夜の私の煩悶！ 出来るだけ先生のお顔をさけたがチラリと見たその青い事。どんなにか胸を痛めて、私のために思ひ悩んだ下さったか、その悩みその心痛、それを思ふと、如何お詫びの言葉もない。午食も夕食も断つて、たゞ二階の自室に籠った。薄暗い室に洋灯もつけず、書きかけの手紙を置いて、悲しく机に打伏した。

と足音荒く先生が後ろに立って呼ばれた。

「美知代！」

「先生！」

「その手紙は誰に書く？」

「先生、後生ですから、先生！」

「誰に書く手紙か、それを訊いてるんだ」

「打伏したまゝ、顔も挙げ得ないで唯云った。」

「もう少し、もう少しお待ち下さいまし、手紙に書いて、差上げます」

先生が階下に行かれたそのあとすぐ、私は洋灯をつけて、涙の中に手紙を続けた。

泣きの涙で先生に書いた私の手紙は、果して、どんなものであったか。

先生 先生御門下として、私は実に価値なき女で御座います。先生の御懇情、御慈愛に對し

どうぞ虚実の段々よろしく御判読願ひ度い。

先 先生 私は墮落女学生です。私は先生の御厚意を利用して、先生を欺きました。其罪はいくらお詫びしても許されぬ程大きいと思ひます。先生、どうぞ弱いものと思ってお憐み下さい。先生に教へて頂いた新しい明治の女子としての務め、それを私は行って居りませんでした。矢張り私は旧派の女、新しい思想を行ふ勇氣を持つて居りませんでした。私は田中に相談しまして、どんなことがあつても此事はかりは人に打明けまい、過ぎた事は為方がないが、これからは清浄な恋を続けようと思つたものです。

けれど、先生、先生の御煩悶が皆な私の至らない為めであると思ひますと、じつとしては居られませんか。今日は終日其事で胸を痛めました。どうか先生、此の憐れなる女をお憐れみ下さいまし。先生にお頼り申すより他、道がないので御座います。芳子 芳子の懺悔も私の嘆願的告白も、どちらもその恩師から突き返へされた。

「此手紙はあなたに返す。此事に就いては誓つて何人にも沈黙を守る」竹中氏は云った。私から嘆願的告白を渡された花袋先生は、怖ろしく怒つて、それを私に投返された。「弟子から師匠に破門状を突きつけるとは何

奉り、私は何を致しましたでせうか。身も心も、わが捧げ得る限りを尽して、お事へ申上げ度い、この日頃のこの心にもか、けらす、結果となつて現はれた一つ一つは、皆悉く、御心痛の種ともなり、御悩みともなることはかり。そむき参らす心は御座いませんけれど、如何しても、その御厚情に添ひ奉り得ぬ、あはれなる運命の女で御座います。父母の氣に入らぬ青年を、自ら將來の良人として擬ひ恋したそれが、この忘恩の罪に苦しみ泣かねばならぬ、悲運で御座いました。せめては先生御一人だけの御理解を得て、同棲致し度い旨の告白、温情ある恋の保護者たらん、その忝き御慈愛の御誓ひの下に、海山はてしなき御心尽しにも、頑固なる父の心はとけやらず、如何とも致し難き次第となりました。にもか、はらず、先生は飽くまで至らぬこの私を、先生御庇護の下にと、いろいろ御尽力の事、身に余りある光榮と存じながら、而も私の此の申出。次ぎから次ぎへと、御心痛、御悩みの種のみ、備へ参らす此の罪かなしくわが身の至らなさを、只々泣いて、はや胸もつぶれ、頭脳も乱れに乱れ、何を如何書きてよろしきやら、それすら、わきまへ兼ねますが、今更ら彼氏を京都に歸へすこと

ぞや、俺はこんな手紙は受取らん！」

芳子も私も、郷里の山に悲しく歸つた。お互に最後の告白を異にして、その突返され方も違つた以上、「蒲団」を読んだ感じも別だつた。私としては元々、先生と云えば神様も同様なので、私の彼氏が秀夫のモデルに使はれて変な具合に描写された、その事を憤慨して腹立てた以外、自分の名譽が如何毀損され運命が如何影響されやうが、一向平氣で、確か早稲田文学か何かに乗つた、花袋氏の大胆なる告白云々の批評文に對し、飽くまで先生を弁護して、其当時の青年雑誌に寄稿までした。實際師としての先生は嚴格で立派で、殊には神様とも見る先生の胸に、変な情火が燃されて居た等、一切測り知る由もなかつた。とは云へ郷里の山に居て、必死と否定し続けた私も、再度上京先生の許に身を寄せた時、もう一概に以前程、否定してばかり居られないみたいにな風に、なりかゝつて居たりうでした。「蒲団」の直後私は先生から、度々詫状を貰つた。モデル問題以外。実に相済まぬ此煩悶、許して貰ひ度い此罪と例のやさしい、花袋調で書き送られた。芳子の告白に對し何人にも守るとの約束を「蒲団」で満天下に発表した、竹中氏から芳子への詫状なら知らず、元々詩化され過ぎた絵空事式小説の筋位にし加思つてゐない私は、何も大袈裟な

如何にしても忍び難く、私事彼氏に代りて退京と、心を決めました。私のこの申出で如何にしても堪へがたく、或は何時の世までも許され難き忘恩とも存じますけれど、女は良人に従ふと云ふ、聖書の言葉を此処にひきて、せめては申訳がましくお願ひ致します。

先生、私のこの悲しき忘恩の罪、お許し下さいまし。私は敢て未來の良人たる彼氏に代つて退京致します。限りもなき御いつくしみの御手加へ給はん御膝下を離れて、悲しく郷里の山に歸ります事を、涙にむせびつ、申上げます。

美知代

これこそは私最後の告白でした。先生御庇護の下に、何処までも私をかばひ、飽くまで彼氏に退京を迫る先生に對し、私自身が未來の良人たる彼氏に代つて退京したため、郷里の山に歸る罪を詫びた手紙です。

### おそろしい花袋の

### いかりをかけた私

それがまあ、「蒲団」の芳子の最後の告白は如何でせう。此処に比べて書くのも、恥かしいを通り越して、いっそ類の種ですけれど、比べて見ない事には、お話にもなりません。

文字で詫びられる筋がない。併し思へば先生は、例の破門状一件を深くも怒つて「縁」の敏子のモデルである私が、師に背いて恋人と一緒に家庭を破壊して、一旦師の監督の下にありながら、更に又元の家庭に戻る筋書の忘恩の弟子となる——世間知らずの若者と云へ「縁」が発表されるまで、猶も先生を信じて、其本心の如何を知らず、種々の善当を演じさせられた、私と彼氏の愚かさよ……彼氏は先生と初対面の其抑々の其日から、僕の美知代なる先生の言葉を嫌がった。と又「縁」の中で先生自身である筈の清も云ふ「自分が敏子を愛した事が、斯うした三人の運命を作つた基となつた」或は云ふ「尠くとも復仇してやらなければならぬ」と。こんな氣持ちで観察され描写された、私の彼氏こそ好い面の皮ですし、三人の基をなさうがなすまいが、左様な事に敏子のモデルたる私に、一体全体、何の責任があらうか。なまじ温情なる恋の保護者たる資格もなく、それを誓つて、純情な私達二人を欺き通した花袋先生が恨めしい。併し飽くまで恩は恩、怨みは怨み、私のこの怨みは恩師以外の、単なる花袋氏に對する怨みである事は、云ふまでもない。

### カメラ・大竹 新助

(用字その他、原文のまま)